

19

594

曲亭馬琴  
狂文集

曲亭馬琴  
狂文集

091567-000-4

19-594

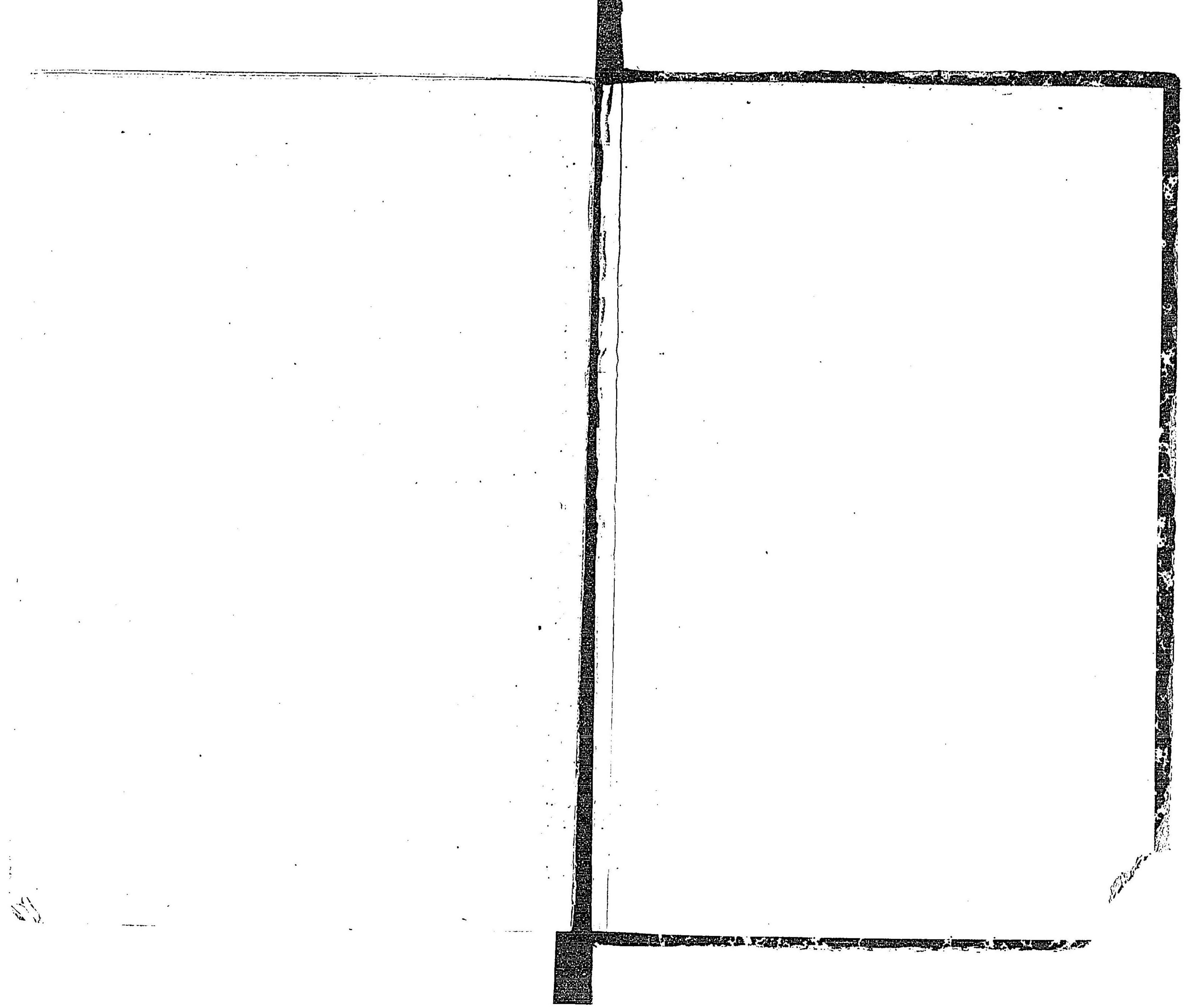
體新書

薰志堂

M30

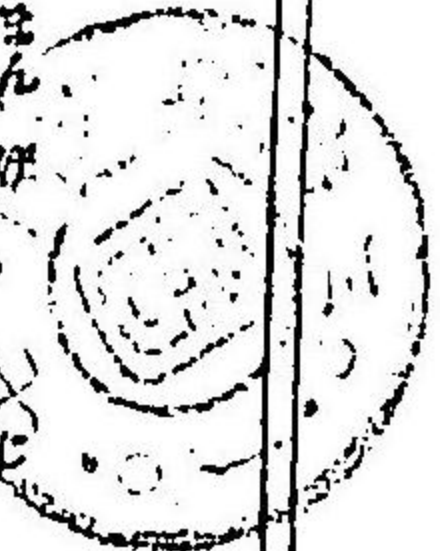
DBO-0011





自序

予一日机上の塵と拂て反故數十張と得たり。是皆慢戲の自  
 備となすものにあらず。終にこれとて屏  
 風の被れたるに帖す。明日書肆何がし來り。例の戲作と  
 び。談話の原かの屏風と見て駭て云。こゝに一奇本あり。何ぞ  
 いたづらに寒夜を防の一用に當んや。請ふこれと編て梓に  
 ちりばめん。予云無用。凡狂文の妙たる。先に自多樂文集  
 あり。後に四方の赤あり。予が性耳目疎庸何の才ありてのみ  
 づら文と誇らん。昔肆云老ならず。凡戲文は新研とてよ  
 しとぞ。作新なれば閱者も又新し。老若の戲と観るが如き。流  
 行としらすして頻に古人と賞す。豈女子少年の歡ぶ所なら  
 んや。遂に屏風と携へ歸り。明日別に一隻の屏風とおくれり。



所謂櫃と買ふて珠とるへす類なるべし。志を以て後書肆町  
 呼これと編み。則予に標と乞ふ。予やむとと得ず目て醴新書  
 といふ。夫嫺母の小兒と賺そや。必醴ともてこれと導く。兒歡  
 て至れとも醴なし。古人云談諧譎談甘と飴蜜の如しと。蓋古  
 人の作文は甘して味あり。今の戯作は甘しといへども味な  
 し。譬は諸白と醴の如し。この書猶醴にだも及ず。空しく醴の  
 名あれども甘からず。又少しの味ひなし。もし夫これとだも  
 取るとあらば。嫺母の小兒と賺すにひとしく。泣すに遊ぶは  
 一なるべし。

享和三歲次癸亥末端月八日

曲亭馬琴書於梅花詩屋

醴新書目次

女達磨贊 二章

曲亭馬琴狂文集自稿

關羽贊

朱買臣贊

虛無僧贊

夕さくら

士峰晴天

美人看月畫贊

士峯霖雨

士峯晴天

醴茶

芭蕉贊

酒徳文

賞茶

兩岸眺望

石龜贊

青樓曲

青樓菊

贈總領甚六文

くるわのさくら

墨水

三平二滿贊

送山東京傳文

贈<sub>二</sub>木目田樂<sub>一</sub>文  
 題<sub>二</sub>菅家服章石<sub>一</sub>辭  
 題<sub>二</sub>安宅關辨慶偽鞭<sub>一</sub>義經<sub>二</sub>圖<sub>一</sub>歌曲  
 戲子點顏鏡序  
 柳に湯舟  
 夏の月  
 田舎獅子序  
 料理報條  
 万壽井鯨報條  
 四吟俳諧十百韻序  
 役者三十六歌撰序  
 百川合會序

譽澤村宗十郎<sub>二</sub>詞<sub>一</sub>  
 寶永年間<sub>二</sub>戲單<sub>一</sub>引  
 宇治川先陣畫贊  
 ひさごに春駒 二句  
 豆藏贊 二章  
 舞衣裳  
 戲作解  
 煎茶報條  
 出世落雁報條  
 追善千句序  
 百川合會報條  
 秋の扇

夢に冥土  
 名古屋より  
 貸本招牌  
 万歳畫贊  
 大磯  
 贈<sub>二</sub>曠漢<sub>一</sub>文  
 贈<sub>二</sub>紅蓼<sub>一</sub>文  
 月光亭記  
 祇園妓女贊 二章  
 俠者畫贊  
 贈<sub>二</sub>大野木<sub>一</sub>詞  
 蒲萄に栗鼠

一年一日飽筆研  
 扇の雪花  
 七里津  
 藐姑峯雨  
 小夜中山  
 書畫帖序  
 審雨堂記  
 竹樓記  
 贈<sub>二</sub>歌妓信<sub>一</sub>詞  
 浪速より  
 桑名より  
 晦日の月

- |      |     |
|------|-----|
| 少女畫賛 | 狸畫賛 |
| 大黒賛  | 念佛講 |
| 布袋賛  | 自戒  |
| 妓女賛  | 獵者賛 |
| 牡丹賛  | 鳳巾  |

醜新書目次畢

醜新書

◎女達磨賛

遷に九年の面壁とかこち。閨に十年の苦界とらむ。甚麼者  
 女菩薩も九日のや  
 ◎おなじく

迷へば苦界十年の  
 六明の今。あらひ髪も拂子の如し。

傾城の年も實も  
 (再考) 遷は九年の面壁とかこち。閨に十年の苦界とらむ。

迷へば花街五町の  
 む。悟れば廿七明の曉。見へり柳の拂子のごとし。作麼生  
 個女菩薩も九日の約束本來空。簾笥の引出し一物なし。

◎朱買臣贊

山かつも春は薪たきぎとよそにして詩にこり歌にこる櫻哉

◎關羽贊

髯髮三千丈。依あかき朱如個剛つよし。不知偃月げんげつ。何處得周倉。

◎夕櫻

天香煎と空しうすることなわれ。時に俳連なきにしもあらず。

花の雲鐘は上野の淺草か日ともし比がちやうとよし原

◎虛無僧贊



客とつるの巢こもりあとうたがひ。來

なんしのひとよぎりは。こゝろのたけに千代とたのしむ。たまくは可なり。まげくは御無用。

◎美人看月畫贊

とうなは見がたきともてしたはれ。このはしのふともてあはれふるし。

さゝやきの橋わたる間やおほる月

◎士峰晴天

三國一粒の山。雪はしらげたる米のこどく。雲は甌こしきのけふりに似たり。誰かいふ不二は是世界の燒飯也と。みる人胸につゝへて高し。

◎士峯晴雨 紀壬戌

半顔粉黛士峯涼

夏雪よそはひなす装成仙女房

雲雨百工有手段

頂如帽子もすそ麓如裳

◎士峯霖雨

紀壬戌

笠は富士に似て。いたゞけども山とみるに便りなく。杖は足高と助て。あめども裾野に遠し。

われに句なし山に不二なし皁月雨

◎芭蕉賛

ゐたちは檜笠の圓にやつれて。實相無漏の古池と愛し。こゝろは竹杖のほそきとたどりて。隨縁真如の新月に嘯く。行ふところ僧にして僧にあらず。吟するところ歌に似て歌に異なり。作麼生。奈良茶三斛とくらはすんば。いゝで俳諧の味ひとしらん。

◎譏茶

龍團雀舌の高味も、とめねば。陸羽が西湖水もうらやまず。盧同が七椀はむづろしく。利久が一杓は飲足らず。世間茶と

いふ輕薄兒。あしたに山吹いろと食り。もふべに馬の小便と映す。

◎賞茶

茶とたしむ人茶にうゝさるゝとなく。茶としらざるものちやといふとおほし。

山里も茶菓子にさらし事に、す松風の音落雁の聲

◎賞酒  
庚申紀行 應豆州  
下田北村氏 需一作矣

夫酒は百薬の長にして。又過せば万病の半たり。長はんこゝろに相混じて盗人上戸の名あるにやあらむ。まゐはあれども古人の三友も酒と以第一とす。小人のまじはりは三文の智恵なくして。六文の醴とすゝり。君子の交りは。七釂八醋の觴と求めずして。醉醒の水より淡し。こゝろ以酒はありなげ



れども爛に及ばずといふめれど。又一斤と呼ぶときは。さら  
 に秤目あるに似たり。飲中の八仙歌。李太白は諸白の事にあ  
 らず万葉の十三首。大伴卿は犬のみの一稱にあらず。されば  
 男山味ひ高しといへども。てつへんまで登るとなく。七梅一  
 本生といへども。下戸の爲にひらきがたし。飲むもの三の癖  
 あり。飲で笑ふものは酒にこそぐらるゝがごとく。飲て哭も  
 のは酒と患ふることく。飲で怒るものは酒とうらむに似た  
 り。その飲むや。蚌にあらずして座の長あらんとおもひ。そ  
 のさすや。蜂にあらずして味ひ蜜也と賞す。跡引上戸。揉上戸  
 酒池肉林の蓮葉も。何ぞ樽底の濁りにままんや。小科もこれ  
 が爲に許され。大患もこれによりて忘る。の中山千日の生  
 醉は。干寶が文にくはしく。玉の觴の底抜上戸は兼好が筆に

殘せり。何がし主人。性酒と嗜む。よて予に酒徳の文と乞ふ。予  
 蔵に筆と探て。下戸の建ざる蔵の壁に書していへらく。天の  
 美祿。地廻り酒。よく人の和とたのしまんとならば。酒のひ  
 ども酒に飲るゝとなかれ。主客こゝに興に乗じて。酔てその  
 終と知らず。

酒一斗志ばし盡中の月見のな

(再考) 夫酒は百薬の長たりといへども。又これと過せば  
 万病の半たり。長半既に混じて盗人上戸の名ありけり。し  
 めはあれど。古人の三友も酒ともて第一とす。小人の交り  
 は。三文の智慧袋とはたきて八文の醴とそゝり。君子の交  
 は。一片の席料と論せずして酔醒の水より淡し。こゝとも  
 て酒のはありなれども間に及ばずといふめれど。又一

斤と呼ぶ時は更に秤目あるに似たり。東坡はしやれて掃  
 愁帚とし。僧家にこれと般若湯といふ。味酒の三輪のむら  
 し。杉葉立たる又六か門と極樂と稱し。つひにこの身はと  
 つくりとよめるも。吳志に似たるとありといふとしらさ  
 りけん。青州の従事とは腹臍にいたるの謎。眞一先生とは  
 三の一ツのあへしとば也けり。されど北方の李酒葡萄酒  
 又南方の蜜酒樹の汁ともめんとすは。秋葉の山に猿酒  
 と盗み。江島沖に鸚鵡とたづねんよりまだるるべし。そ  
 は飲中の八仙歌。李太白諸白とまちがひ。万葉の十三首。大  
 伴脚劍菱としらす。されば男山味ひ高しといへども。てつ  
 へんまでのぼるとなく。七。梅一本生といへども。下戸の爲  
 にひらきあたし。飲む者に又三ツの癖あり。飲で笑ふもの

は酒と愛ることく。飲で泣るものは酒と愁ることく。飲で  
 怒るものは酒とうらむに似たり。その飲や。蚌にあらずし  
 て坐の長らんとと思ひ。そのさすや。蜂にあらずして味  
 ひ蜜なりと賞す。或は跡引ねち上戸。酒池肉林の遺葉も。い  
 ろで樽底の濁にしまん。小科もこれが爲に許され。大禮も  
 これによりて整ふにや。中山千日の生酔は。干寶が文にく  
 はしく。玉の盃底抜上戸は兼好が筆に残せり。彼椀久がび  
 つくり丸。池上が降龍の盃。はかりしるべし水鳥記。げにや  
 翠帳こまものみせ。枕ならべしぼうだらとち。酔たよたよ  
 五尺のあやめに。水とそゝぎし水雑炊。くらはゝ藏へとあ  
 ら走り。下戸の建ざる壁訴訟。さいた風味のさゝ酒も。鹽梅  
 よしと證して云ふ。

天の美祿地廻り酒も人の和にしくものはなしと思ふのみとぢ

◎石龜畫贊

三十余のとし月なすとなくして更にやすし。よて南華真人のおもむきに效ふ。

鍋焼に龜はのがれて千々の春

◎兩岸眺望

淺草猪牙のあさあは。客とかしは餅にして歸り。深川ふねのゆふなは。人と團子にしておくる。

◎菊畫贊

客と籬のもとに立して。悠然としてなんざんす。

◎青樓曲

鳳凰現壁店前隈

龜鶴街珠樓上盃

引々四小聲逢色客。

書三大哭得金媒。

月梳兵庫。紬糸薄。

花酌男山探袖梅。

苦界十年虛與實

手廉無偽與州才

◎廓中櫻

花は人にみられん爲に匂ひ。人のはなとみんためによそはへり。

流れていこゝも妹脊の仲の町よしの、花のよしや吉原

◎贈總領甚六文

迷子札とたのみて。遠く遊ぶとなわれ。世間無筆多し。わが家のまへとたのみて。猥にはこるとなわれ。親仁も留守がら也。詩に云。紙鷲飛て天にいたり。糸されて淵にはまる。すべら

く。君子の徳風と仰ぐべし。

◎阿多福壽贊

鼻は團子に似て。花より賞せられ。頬は饅頭にひとしく。大象  
ともつなぐべし。福や福。汝が福歟。來れわが福ののみさん  
めとらん。

◎墨水

太郎進酒墨田川

手裡探魚生簀船

得し纏踏浪欲涉向

琴高奚學北州仙

◎送山東京傳文庚申初夏山東京遊

庭中の阿須波の神にさそといひしまばのこなた。京橋の京  
傳老人。世わたる業のいとまや有けん。此ころ富士の煙り草  
みんと頼にらう竹の杖と曳て。脚え煙管の旅人とぞなれり

ける。いでや月日の鼠屋もおしうつりて。芋張の苗賣るあし  
た。櫻張の青葉と、も大江戸とたち出。二四八の符牒附もけ  
ふよりは人にもだねて。時鳥なくや五月の頃までは。頼邊  
さへつかへざる。あけ直なしの長逗留は。めでたく惜しむ名  
残也けり。風に靡く柳行李。松に賽ふ檜笠。木隠る、まで見お  
くれば。消殘る富士の雪。眞白にして燈石と建るをどく。こや  
初旅の葉にはよき目當なるべしと。ろの行かたと思ひはる  
るに。吉田口の茅花ほうけて。袋のはくちとちらし。素走口の  
芒とぐるにして。水豹の胴亂にも似たるべし。三穗の松葉茶  
に田子の通しうら付たるは。開耶姫ののみ入にして。清見が  
たども呼ぶものにや。こゝに紫皮の藤枝あれば。あしこに白  
地の岡部あり。鞠子のとゝる蠟引よりねばり。大井の莢は緒

べほぞ丸し。早き不二川に注文の船底形とぬはせ。高き賤機  
 山にあつらへの名物裁と織らせんとそ。火打鎌うつ山路  
 とわけのるば。閑静縫のおもひもなすべく。煙管筒縮田の驛  
 に夢とむそば。大盡張の饗應もあるべし。山は三國に聳へ  
 子は山東に名高し。西行にしてわろく。業平にしてふけたり  
 はやく泰山とわきはさんで。北廓吉原の本店と穿給へどこ  
 くに聊送別のおもむきと述。

竹の杖槍の笠に柳こり木おくれてのち君とわられん

◎贈木目田樂文

尾陽に田樂法師あり。淮南王の調味に入らず。相模入道の弄  
 とならず。祇園豆腐のぬめりと捨て。山屋豆腐のやはらかみ  
 と愛し。此頃予が門に入て。戯作の献立にのらんと也。蓋し戯

作に文法なし。只才とめて師とし。洒落とめて法とすべし。夫  
 豊島屋の田樂は。其のた大にして。風鈴の短尺にひとしとい  
 へども味ひなく。甲子屋の田樂は。其形小くして。扇箱の名札  
 に似たりといへども味ひ高し。予試みに問ふ。何によりてあ  
 田樂といふ。云家は木の芽の青本に富て。今や蕃椒味噌の赤  
 本と綴らんとす。こゝとめて田樂の名ありと。嗚呼久あたの  
 天蘇羅は。あらあねの地酒によるしく。辛子味噌の黄表紙は  
 一本の鹽梅によるなるべし。寧鯉の魚田となりて。臍とあ  
 ゆるとりしみは書とも。芋田樂のさし合とおもへ。寧菜飯の  
 茶話となりて。きせんのおに入るといふとも手前味噌とあ  
 げるとなあれ。おでんく亦でんく。田々呵々として。これ  
 が爲に腹太鼓とらつとるくの如し。

◎譽澤村宗十郎詞 代人作矣寬政庚申春訥子  
在京師而以有故不果止  
東西く狂言のお邪魔もかへり都までわさく逢にきの  
國屋丸にいるはにはへどつ子。名に立役の筆勢は誠しんぎやうに眞行  
宗十郎様。嗚呼がましうは候へど。つらひ習とその儘に。手本  
の折と江戸子が。ちくとん斗譽申そふ。東西く。いよ立物立  
ても更に憎あらぬ。金乾紙の鈎菊は。京にすみ繪も張交て。時  
にあふみの八景はど。眺と瀬田の橋が。り。外さぬ的の矢走  
船。こがれて三井のるね箱と。江戸へもひやく評判は。比良一  
面にふりける。雪とすみあら隅々まで。よく行わたる秋の月  
人も千引の石山寺。登り詰たる俳優は。見るうち心よるの雨  
われあら崎と機敷の。たへ落る雁がねは。まだ一羽二羽  
三番叟。朝あらぬいとらく。と詰る袋の粟津が原。外に類ひ

は又あらし。ハレやくたいもわれなから。及ぬ詞の寸馬豆人  
その山水の澤村や。馴染久しき京浪花。畫畫一枚の筆がしら  
どちらへも向く藝態と。人好のあるよい手風繪も申されぬ  
彩に。大和唐様世舉て大入狩野と古筆見も。極と出して甘心  
關東。吾妻ではしがる大出來は。是まれもの。一筆あたりと  
ホ、うやまつて白。

◎題菅家服章石辭 庚申紀行應駿州  
沼津地骨窟需作

嘗聞く地骨窟の主人。家に雲根多し。求る所多年にして終に  
一奇石と得たり。石面梅花の形あると。もて菅家服章石と號  
く。依てこれと見れば酒樽の印のごとく。品川の釘隠に似た  
り。もし與市としてこれと投しめば。股野も手と放となかる  
べく。九太夫としてこれと見せしめば。から脱の駕にひめか

くべし。されば黄石公も庭の飛石とやらんとねがひ。佐用  
姫も様の踏石とやらざるとうらみん。余たましく石の上に  
三年の閑に乗じ。杖と石橋山に曳の歸るさこゝに過る。則主  
人石と示して手に文と請ふ。遂に石に倚て案とし。筆と探て  
題していはく。古人石と打て羊と走せ。今人石と撫て梅と論  
ず。衆人あやしむとなれ。もし木星墮て形となすにあらず  
んば。必造化の轉業なるべし。

◎寶永年間戲場番附引 應豆州下田淺岡  
氏之需而作矣

陽春白雪の切紙天井より降かゝり。下俚巴人の曲太鼓世に  
のまびそかりしより。五花鬘弄の舞の袖は。宋皇の目とよる  
こばしめ。山三阿國の扇の手は。太閤の宴に召る。唐山の勾欄  
戲子。本朝の芝居役者。梨園の子弟。惣座中。残らず罷り。いでそ

の頃は。寛永のむろしく。勘三が椿幕江戸の中橋にりけそ  
め。颯々の風吹屋町に市村の竈賑ひ。鋸の木挽町に森田の舞  
臺と柱建し。線香一本の切狂言は。藝子のむろひよりはやく  
源左が練衣の女形は。夜鷹の幽靈にも似たるべし。さると元  
祿のころより俳優のすがた。稍そなはりて。鳴見が藍絞は。敵  
役のゑどりとなり。市川の紅染荒事の筋隈と稱し。才牛が牡  
丹助六が目識となり。舞鶴が鶴の丸旭那の定紋となれるな  
ど。あるは大薩摩の一口にありたりつたへ。或は河原の三の緒  
に聞及べるのみなりしと。今年曾我狂言の伊豆の國に行脚  
し。赤澤山のあへるさに。病氣工藤の快哉亭とおどづれ。祐つ  
ねならぬ對面して。主翁の巷に木瓜と見れば。家に古き番付  
あり。その數五郎十枚ばあり。ひまもく馬の跡足はやく。月日

の鼠木戸こゝにうつりて。今と去ると百有余年。二階棧敷の  
 わがれる世には、簾座敷の聞わきがたきも。僅なる紙。一枚看  
 板に見物し。通り神樂の鳥居流に。大の眼のはめとはづし。鶉  
 棧敷の夜更るまで。土間切落の膝とあはせ。されし、びれの  
 京登り。下り役者の評判記に時移れば。夜廻りの拍子木も。舞  
 臺のきつるけりとうたがひ。遠寺の鐘のうち出しも。いつし  
 ろこゝに近づくなるべし。げにや年々歳々花の顔見せ同じ  
 といへども。近年三座役者同ららず。三階無安の役不足。生死  
 流轉の早がはり。懐古に大鼓打ませて。机の上の幕づらへな  
 く。顔あたらしき旅役者が。雨のやどりの初狂言さる御方さ  
 ま御好に付。跡へ残すと趣向にして。ひらく硯のふた立目。そ  
 の爲狂席さやうとしるいふ。

◎題下安宅關辨慶偽鞭義經圖上

にくい くは可愛のうらよ。いやなかたにさすらりよ、  
 りも。すいた男にうたれたがまし。人目あたりの關こゆる日  
 は。手ごとのつくしてたゝいて見せて。それが苦肉の謀。

◎宇治川先陣畫贊

河岸揚の高名は是米俵の亦太郎。判取帳の一番筆。依て勘定  
 如件。

◎戲子點顔鏡序 壬戌春既

古人戲と以夢に比す。喜怒哀樂原真情にあらそ。粵に本町の  
 何がし戲子三十二相と著と。廻郭環が正本によらす。晴明が  
 ト書に泥す。遊戯三昧作者の○みづゝら新しう△り升と稱  
 す。蓋戲臺の打扮は。介と白に善悪わゐる。



のもんき



りゐたをよまたちやくかたやくとけ旦生ぢんせい淨打じやうだ譚たんで東捕塞かほせと木魚こぎよとみるともいづれゐこれとしらま弓ゆみ。やたらに引が最負さいふじや相あひま。夜明よあけの太鼓たいこが三番さう。看板かんばんづらがあたり相あひま。千さう。万相まんさう。お船ふねはぎつちら這小冊わんせう。神相かみさう全書ぜんしよのひゞきとあり。新彫しんてう珍書しんしよの大戲おほな標な。點顔てんげん鏡かみ中七情じやうわゐる。實見じつけん通としの法院ほふいん本ほん。唯ただはこの書しよにとゞめたり。相者あひまへ。

○瓢箪ひょうたんに春駒はるこま

治聲ちせい酒しよに意馬いば先まへつ狂くるふふくべゐな

○又

伯樂はくらくもゐすみくむ日のふくべゐな

○柳やなぎに湯船ゆふね

西施せいし去さてやなぎにのけし浴衣ゆいゐな

○豆藏まめぞう賛さん

投な豆まめ以も豆まめ兼かみ陶とう

豆放まめはな掌てう遙進てうしん高たか

本識ほんしき生せい人にん外島がいとう

奥山おくやま邊へん豆藏まめぞう器き

○又

壁かべに大小たうせうの差さありて。芥かに機關かつかんの糸いとなし。玉田たまでん玉たまと殖はて玉たますく多く。觀官くわんくわん錢ぜと詩して。錢ぜいよく少すくし。憐れんむ者もの化か子し介けい。日ひ々に悪河あくがの辨べんと耕かして。笑わらの種くさねとゐるそに富とみり。

元日げんじつや喜怒きど哀樂あいろくの種くさねゐるし

○夏の月

庚申かうしんの夏居なつゐとトとして舊燕きうえんの栖すみかと得えたり。房ぼうと曲亭まげだいらと呼よび。堂どうと著作しやくしやくと號なづく。後園ごえんせまうして蕉窓せうそうの夜雨よあめとさくに足あらずといへども。主客しゆかく相對たいたいして。僅わずかに膝ひざと容ゆるるゝの容ゆるやすきに似

たり。

まするゝみ家買あてゝ夏の月

◎舞衣裳之需作矣

くればどり。あやありたさの舞衣しやう。名古屋草履にひも  
つけて。いざみにもらん鏡屋も。おやまべにやのどころさだ  
め。鏡屋小山紅屋共名つなぎとめたる駒新さんも。駒新浮  
もや筆にはうつし繪の。いろどり娘おぼこづと。乎保古髻女  
髪たれに切りにし前も。許為人剪前髪一寸さばけやそさ  
のぬしさんもあるに。ほんによしてもおくれんさいで方つめ  
らさんすなア、いたいてや。天也いたのいたこの蝶々も潮  
衣服所摸様しぼりあげたるまとは。明神さんも社熱田おしり  
んる方戀の重荷はまつみにつらい。松葉荷ひの千よさへひ

とよ。朝々有荷薪來積る思ひの岡山や。せめて夢など委見の。岡  
委見共者謂之松葉荷積る思ひの岡山や。せめて夢など委見の。岡  
屋鶴絹すかた似あふた縫もやう。つひあひそめて水口に口水  
布家。おもはぬまでのぬれ衣と。はしあげてたべあすのお  
どりに。

◎田舎獅子序之需而作矣

貝原に和漢事始あり。田樂に田舎獅子あり。肥じゝは酒客に  
ありて。獅子鼻は餅好に多し。しゝ食たむくひとは出代りの  
さはり文句。獅子身中の蟲とは大星の金言なり。夫神風の伊  
勢にしては。獅子頭の神事あり。足曳の富士の峯にしては。志  
ゝ狩のありくらあり。しゝ十六の女兒牡丹しぼりと着て美  
しく。しゝゝひだれの抱守牡丹餅と粧ふて醜し。孔明が南蠻  
攻も獅子舞に敵と退け。義仲の西京上りもしゝ葺に客と饗

と。二一石橋の獅。九一もどす大神樂の和藤内。虎さへ獅子で  
間にあはす。文珠菩薩の腰あけ獅子も。宣士儒生の雪獅子も  
どくれはおなじ神樂獅子。祭見に行女夫獅子は。しゝばゝ荷  
ふ鹵取とふとづれ。お祭わたすまくら獅子は。しゝ垣破て忍  
んとよおもふ。相生獅子の相惚に。執着獅子の戀いさるひも  
跡の祭や先の村。よし足付の狂言綺語。なまりちらした金銀  
の。箔に輝く獅子館。誰も神輿とかくべ獅子。三助舞たり赫た  
り喧たり。來たる群集の都鄙遠近。尾張大根の太祝詞。おそれ  
みく紙々のはじめに言。

◎戯作解

野花も見せころあり。村酒も味ひあり。外面如菩薩の都人。剛  
毅木訥の仁兵と笑ふとなおれ。鈍々と鳴る太鼓の撥はおの

づゝら直く。奸々となる鉦の撞木は更に也がめり。こゝと以  
知る稗官野史の才。愚にありて智にあらず。夫智老が言も亡  
る時あり。愚公が山も成ときあり。諺にいふ虚ゝら出た實專  
こゝらなるべし。

◎料理報條應需作之

はゝありながら庖丁

御徳意様鱒。御鮫鱈に御さる。鮫。鳥賊ぼり。鯛慶に存鱒  
まぐる候。鱒又わたくしに見世不鹽にとり鱒。内所のあんば  
い至極よろしく。少しばりはうそ味嚼も上るぐらゐの芝  
煮にて。是も皆さんまの御蔭故と鮎がたぐ。鰻一はいのせい  
ごと出し。うさごに追つく鮎なく。鰻も葉月のまん仲秋。鱒  
も芋掘る月見前。そばしり廻る引札は。無類とび魚上々鱒。た

るべにあらぬ大安齋といふとかれいに鯨としめ。あうのあ  
 はぬのしら魚の。一ちよほ御意にいり牡蠣なら。必いなだど  
 おつしやらすと。鮪へお出と松の魚。濱のさよりの初鮭も。走  
 りとあげたいはら。ごは。お客と鯉のこくしよう札。精進物  
 も外々より。格別下直につくいも椎茸。末長いもに萬代と。ち  
 よびとくはへの丸むきは。よし干瓢にあわ雪でも。運のねだ  
 んと引下て。安くするのが豆腐じやと。利分にかまはぬよい  
 さのこ。是で野暮ならしうとが。梨に九年母柿。贈料理であ  
 ぼちやが當夏あら。工夫いたした大安賣。たとへ榮螺の品た  
 り共。上げましたいとつぼやき。朝から世話とやき玉子  
 すた。息と切溜は。このよに賣ても青物。鮮物も澤山仕  
 入。貝のはしらの中間あら。大蒲鉾の板の間迄。もやしの豆

ではたらさますと。譽るも羨方見ぐるしい。私見世の御取立  
 偏に希冀まつり松露以上。

◎煎茶報條 應大和屋清三 郎需而作矣

此度御披露仕候私店御煎じ茶之儀者。山城伊勢近江駿河肥  
 前。諸州の名茶とえらみ。價は至極下直にて。品は格別上茶と  
 商ひ。利分のうす茶は少しもいとはず。兎角御得意様とひき  
 茶に仕度。只ひいさがせんじ茶のせん一に心がけ商ひ申候  
 そべて引札のしる物自慢は。世間普通の文言にて。三會目の  
 初多同前。よいとわるいと。は御口中がくもらぬ錢。高いか高  
 くないかは九段坂から下町。あがつて御覽じたらうへの御評  
 判とねがひ上候。のやう申せば商賣がらにて。茶な引札と思  
 召お方もあらんが。凡茶と以食物とするとは。もろこし漢の

末にはじまりて。吳志に孫皓が時茶芽と賜ふて酒に當るとも見へたるよし。それより唐の世にいたります。盛んに成行しが。みな團茶抹茶とて。茶に香なと搗ませて丸じたるものなりしと。陸羽老人この道にくはしく。はじめて散茶煎茶とはじめしより。うそ茶濃茶の人からより。二番せんじの番茶まで。みなその遺法と受けまはる。備本朝にて茶と飲むと。むろし後鳥羽の院の御宇。榮西といひし人入宋して。はじめて茶種と持るへり。筑前國背振山に植たりしと。岩上茶と名づけたり。そのうち梅尾の明惠上人。の榮西に茶種と乞得て。梅尾及宇治に殖。宇治の土地茶によるしく。その葉その枝世に茂り。足利將軍義政公。殊に茶と愛玉ひしより。天正のころにいたりては。利休紹鷗の數寄人あり。夫茶に名五つあ

り。一に茶。二に檀。三に藪。四に茗。五に芽と名づけたり。抑古人茶と煮ると。必先つ水とえらむ。茶よく水にあはざれば。匂ひ高き山吹と。忽河童の屁と變じ。色うつくしき黄金水も。終に馬の小便となるとは。是みな水のあしきによると。或先生の申されしが。只私めは理屈もなく。上茶と下直にはたらいて茶はとうあつても大和屋茶なる程此邊一番茶。さつても安い茶。はやる茶と。折詰の折と幸ひ。角袋の爪もたゝす。一斤袋の末ながくと御用向被仰付。外く様へも茶ばありながら。御風聴の程希上茶てまつり候以上

◎萬壽井脂報條

山本吉兵衛料理盤の眞中坂に登り。組板橋と向ふに直し。たつ付の裾のいつまみ。しかつべらしく言て曰。あらたまのど

しのくるわにあらねども。いろけ食氣の世の中と。何がな思  
 ひ付出しは。安もの日のつけ文ならで。返も工夫とこら  
 し。一ばんやり手若い者。禿新艘新製の。鮓の御披露まはし方  
 鹽氣と酢めとわり床に。ちよつと向ふのひとよ鮓。直し肴の  
 口取も。抱てねだんの大安賣。名さしの御客はねなじみ衆。う  
 まい咄のさきり文句にも。こはだ百まであぢや九十九まで。と  
 もにしら魚はねるまで。千代もあらぬ繁昌といのりまい  
 らせ十露盤の。玉子の鮓のきみもゑに。たとへあふてもあは  
 びでも。賣り鯛のすし。章魚の鮓。蛤すしのかひありて。防鮓鮓  
 ろら通ふ神。惚たしようがに。蓼の葉も。引はり足らぬ籠へい  
 どう。賣れると思しめしどあら。唐にも又ない鹽梅と。評判日  
 々に増井鮓。御意に入たと御見立なされ。ちよつとあがつて

御らうじろ。けふ引札の敷ぞめに。枕のもんまで梅鉢は。天神  
 鬚に投島田。のみの利生と暖簾の。外まで買人のみつぶとん  
 是鮓桶の惣仕廻。内所の大福てふつがひ。はなれぬ屏風の山  
 本屋。大極上々吉兵衛と。御風聴の程希上奉候。

◎出世落雁報條

益御機嫌とは引札の通り文句。無類大安賣とは商人の空誓  
 文には候得共。私ばあり正直の。あうべに宿るのみ方表。御馴  
 染うすき細元手。あら。厚い恵みと蒙りたさ。よつ程つよいお  
 して。るや。浪花に一個の慶と開き。商まする出世御菓落雁は。  
 行雁連と亂す。軍術にもあらず。長蛇雁行の陣法でもなく。ど  
 うじや雁首の脂下りに工夫とこらし。ない智恵と飾にかけ  
 て。糲と精げ。あま口な了簡あら。大白の砂糖と以製したる所

の糕落雁に候へば。朝の茶はけにめしあがれば。運は旭の登  
 るとどく。毛唐人にも目とさまさせ。夕の茶菓子になさるれ  
 ば。福は月宮に遊ぶに似て。乙御前も頼とおとさせ。口に果報  
 はまのあたり。夫太閤記は再板とへりみず。大食は脾胃虚  
 と辭せず。あく敷ならぬ新店も。よく人の和に大坂の御ひい  
 さつよい御陰にて。些塵らしくなりましたら。これも出世  
 の老らくがん。武者ゝあがれば強うなり。たとへ何はど加  
 藤ても。小西てあがれば柔し。誠に一騎當然の。理と非にまげ  
 ても御評判。ねがはにやならぬ大安賣。正直正銘のこのした  
 と。二枚つかはぬ一枚看板。三幸屋万藏と御たづね。多少によ  
 らず御用向。被仰付被下置候様。偏々奉希候以上

◎四吟俳諧十百韻序 寛政九年  
 作文

明に希世の七子あり。我に驚才の四友あり。商山の四皓と學  
 んどするに。才短して齡わらく。虎溪の三笑にくらべんとす  
 るに一人あまれり。この友や。水により山に住むといへども  
 その居幸に遠からず。常に也きあひて俳談雅話に飽ぬ。よく  
 詩作らんとするに平仄むづろしく。やまと歌よみ出んとす  
 るに天仁遠波拙ければやみぬ。こゝに俳諧の連歌といふも  
 のあり。名は雅にありて。ことは俗なり。の浮屠の俗談とな  
 そものど日と同じうして語るべし。こや吾黨のものそるに  
 便りありとて。いとまあるとりく。こゝにつとひあしこに  
 もきて。これに遊ぶと既に二十年に近し。この頃家兄十百の  
 つらねうたといふと催して。今年卯月十あまりなぬ。あ  
 日に筆と起し。菊月廿一日といふ日に業やうやく成りぬ。一

月一會百句のうへと出すといへども。愚公が山とらうつすの  
 志とらしなはず。筆と採て稿とまうけざるは。禰衡が鸚鵡の  
 賦に比せんもおこがましく。早吟句と吐て席と驚すは。王粲  
 が宿構句には似げなかるべし。あるは正風と稱するものあ  
 り。或は談林と呼ぶものあり。あるは今古と看破してみつら  
 ら獨立とはこるなぞ。くめのさら山さらく。にみなせ川。み  
 なせる人の思ひ汲むべきとも恥ざるに似たりけり。蘇山は  
 兀々たる駿藩舞馬の防管。みづゝら嵐雪が寂と愛して常に  
 會頭に殿たり。席上筆と取てわたりと省み。あへて句のおく  
 れたるにあらず。附のすゝまされば也といへり。羅文は精々  
 たる。餘臺藩第の宰。必其角が作と好みて。たま〜卷中に魁  
 たり。言外句と練て新聲に耽り。春花宛轉畫鳥と彩る。孤遊は

小川街上の武夫。高欄風光る明月の玉。早吟詠草十五帖に換  
 ぶ。馬琴一句數百韻。點者請來れども敢て筆ととらず。みづか  
 ら稱す琴は是市中の隠と。共に是竹馬鳩車の友たり。しかれ  
 ば卷中の甲乙とあらそはんもいとにげなれど。又いたづ  
 らに紙魚の巢つくらせんもよしなかるべく。四友の雞肋只  
 この卷にあり。こゝに品川のこなた高輪の風月庵は。しるも  
 亡形の友にして。才はやつ山もなほ低く。學は袖浦もなほ淺  
 るるべし。學ぶと吾より先にして聞けるとわれより多し。こ  
 の卷や千句のうま言ならねど。かゝる伯樂あるといかで空  
 しくやむべきやはと。つひに管子が雪中の道しるべと乞ふ  
 とゝはなりぬ。そは燕雀の千吟も。老鶴の一判にしるざるべ  
 し。事のおもむきと端書して。四家の末友曲亭馬琴等。たは



ふれてさふ。

◎追善千句序寛政申年作

今茲八月十二日。家兄羅文の大祥忌とむるへたるに。舊友知己猶いまだ交りと死後に捨す。粵に蕉門後學の大弟子。芳艸亭の孤遊。頓に作是發願し阿耨多羅三藐三回のけふと忘れず。かねて十念の十百韻と催し。俳諧一切經の追薦といとなまんど也。如是我聞一時の戯に似たりといへども。亡者生前嗜る所なれば。一卷千句の披講に臨みて。離苦得樂のおもむきとなさんとうたがひなし。他方本願の詠草既に整ふに至て。奈良茶三ごく傳來の世尊。忽文臺上に來迎し給ふべし。こゝと以おのゝ無量不可思議の新聲に耽ると無盡意也。爾時馬琴はじめに舍利はつ句とものして。こゝに報恩追善の

おもむきと述るとは。南無彌譽勇遠羅文居士頓生菩提。

寢るへりて三とせ經にけり夢の秋

◎役者三十六歌撰序寛政申春戯作

和歌に天仁遠波の習ひあり。雜劇にもんざりがたの定あり古今の序には六義と注し。戯單の初には四番ととめる。柿の素袍の柿本は。この道の聖と稱し。縞の上下の赤人は。艶段の例に摸る。松に寄る賀歌には三番更と舞はしめ。羈旅の都の餘波戲齣には。千秋樂と惜むゆり。小旦浪子は戀の都に名高く。捷義打譚は俳諧歌に灼然。正生の摸鎗は。紅流の色紙より赤く。丑淨の臉上は雲形の短冊より青し。春は曾我に寄る世話事とよみ初しより。長夏三秋の景物とのがさず。造化の拈出冬の日に櫻花と開せ。當座探題の二艶段は。眼ととつては

など詠め。耳と曳て口實とも。花穿は演戲の續がらによるな  
 るべし。されば長歌の妙なるには。別るゝ戀の哀れと述。つゞ  
 しり唄ふ短歌には。よみ人しらすの口技とたすく。ちあらと  
 も入すして竹篋のあめつちと動し。目に見へぬ盲人にも哀  
 れと思はせ。猛き觀場人の心と慰るものは戲場也。こゝと以  
 傀儡棚の段結。三じうあまり六人の俳優と撰出。版元に太鼓  
 と敲せ。當時名たゝる出歌と添たり。みな妙音の當場歌にし  
 て。伎馬反覆の腰折なし。よく一本の調子と合せ。三絃二張の  
 序文と作りて。しるも三筋のいとぐちと解といふと。著作  
 堂の燈下にしるす。

◎百川合會報條 享和辛酉九月廿日大會書畫詩歌  
 櫻此報條 者流於日本橋室町浮世小路百川  
 則是矣

しなてるや。片山の手の飯田街てうはどりにいはりもどめ  
 て。どりのこ呼べる十年あまり住わびぬれを。友垣むすぶい  
 とまさへなきといふにせまじなを。あれたる庭に。手涕のみ  
 てひとり物思ふ折ら。例の三たり四人いで来ていへらく  
 春の花はみるにこゝちよきものあらうつらふにやすく。夏  
 の夕ぐれは行ふにいさぎよけれを。明るにはやし。まいて  
 雪見にこるびてあづきもちひとならんも上戸の爲にわら  
 はるべし。只遊ぶべきは秋也。はた人のまとも秋にこそ見ゆ  
 れ。いさやとちこち人あたらふてひと日盃すんながしてん  
 やといふ。こはよき方人と得たりをしと。つひに四方の  
 みやびとだちとうながし。とみに秋情と慰めまつらんとす  
 こひねがはくは大江戸八百の君子。四海なみせんにはん橋

なるも、川櫻につとひ給へりし。この會や書畫詩歌連俳文章のくさくさあつめたれば。かの百川合海のひゞきとあり。なづけて百川合會といふとと。拙き筆もてつけ奉るになん。

◎百川合會序

莊公の群英の會は。美人の情しらずに興さめ。項王の鴻門の會は六ッ切の路次にさはがし。齊魯の夾谷の會。晋秦の展覽會。是みな喧嘩の中直り。何ぞ風流の遊びならんや。夫龍華の三會は。彌勒もあひがたく。青樓の初會は。權七も馴やすし。今來古往貸切の。二あり參會四海。みな俳談書畫會花の會。西も東も會くく。狐の聲色歌の會。豊後淨瑠瑠めりやす賣會。澤山のその中へ又する會の譏もいとはず。今年今月今日只

今。咄の會にあらすといへども。老爺は山に柴樵る秋。老婆は浴衣の置洗濯。流れて來つるも、川に。開く筈のどた／＼會。詩歌連俳書畫文章。親疎生熟わちなく。何でもござれの人數は。千も二千も三千世界。一によせる百川合會。ありる折にも合詞。山とやそは川が題。先江戸川の歴々達。小松川のなだろき先生。書家畫家は墨田川に筆と浸し。詩人歌人は品川の眺望にこゝろとよせ。俳諧師は深川の舊草とおもひ。上戸は新川に鼻とひこつかせ。下戸は阿部川に口なめずりとと。利根川のこひしり男。誰と小石川より來るあり。瀧野川。山吹娘。更に木曾川の流れにあらす。和文に石川あり。狂歌に北川あり。畫者に歌川喜多川あり。數寄屋淺草神田川の狂歌連中。芝川立川嘘のかはの戯作者仲間。堀川の儒者宋儒の類のあり

はとむき。香川の醫師廢鼓のゝはとたくはふ。市川の狂句。瀬  
 川の書。松川の筆。越川の裂。竟に山東の名物となれり。嗚呼千  
 はやふるゝんなき神子は。日本の大宮川にみそぎし。とさへ  
 ぐ法師すけん者は。天竺流沙川の流れ也。神祇釋教戀無常。お  
 つればおなじ谷川の。妹背川。たえぬ流れの里にしては。川竹  
 もしたはれ。大井川清き淺瀬の淵と見ては。川だちもたのも  
 し。されば此會にわたり來ん人の。いざや川いざと誘ひてん  
 けふには。よもいなみ川の人もあちじと。どほつ川の人。は文  
 の便さへまたれ。うらばみし日とわすれ川の。音なし川にな  
 がすとなく。車川の引もさらず入り來ぬるまに。櫻は山  
 川の如。紙屋川の紙もてはしる。人のしこに筆と染川や  
 よし野龍田川の花もみぢ書たるに。玉川の玉とならぶる。贊

詞に愛ては。へりしはら川とさへ打忘れ。膳札となくさの川  
 に流しつゝ。只川とつ川の。誰渠に。面あはせんととのみ。かの  
 く。思ひ川也けり。よてもものゝふの。八十九ぢ川も。商人の大  
 屋川も。敢て賀茂川の上下とわつとなく。ひたすら酒とくめ  
 川こそよけれ。そもく。天の川の星祭る頃よりこのと思ひ  
 たち。今や衣川の衣うつ秋つ川の未なれば。人もとにやく籠  
 りがちなると。ゝるとおもひ企るは。ほんにばあらしう有  
 柵川と。わらひあふせ川の人もあるべけれと。あすの川のあ  
 そしらぬ身は。時としもえらまじ。只今日のまをに。あふ隈  
 川の嬉しさとおもへば。あその川原のあそぶにしらす。鏡川  
 のねて見し人々は。更科川のさらにもいはす。まだしら川の  
 寶さへ。こゝに打つれ喜連川のなみく。ならぬあひそめ川

となれると。おのがめ川に果報ありや。又み、川の耳垂珠の  
よきにやありけん。げに照るひの川のやぶしわらず。月の桂  
の光りくまなく。千とせ川の末までも。いづみ川の盡るとな  
く。けふのむしろに臨る友だち。ほそ谷川の契り長らんと  
と。とはぎにぶ川の鈍き才とも。へりみず。ふみまき川の事  
のはじめに。あくた川の芥もくた。拙き水くぎ川と。うきなが  
すになん。

◎秋の扇家兄羅文三回忌追悼

此君なくなり給ひしより。よきにつけあしきにつけ思ひ出  
す事のみおほあり。更行く枕にこし方とおもへは。又寐の夢  
もたのまるゝもの。あらさめずや。秋の暑さに残る形見の扇  
の汗しみたる。と見れば。今はた露の置きどころにそ有ける

忘れぬを風の便もなき人の三年の秋にあふきさへうき

◎夢に冥土雖實錄庶幾妄誌故附書狂文中

寛政十一年三月十七日。予夢に冥府に遊べり。覺て後猶よく  
その事と記憶す。この夕亡友何がし忽然と來れり。予あやし  
みて問はく。子は嚮に世とさりぬと聞しに。いかにして來れ  
る。友のいはく。けふしも冥土放赦の日にして。地府のものも  
たまゝ遊行と許さる。來れ子に黃泉と見せしむべし。予あ  
はたゞしく立てこれと共にゆく。更に東西としらす。既にし  
て中途にその友と失そ。渺として山あれども草樹なく。水清  
けれども魚とみず。路に老嫗あり。これと見れば。荆婦が養母  
也。予こゝろよろこびはしりより。別離の情と述。姑は寛政  
七年四月没しぬ。忽小兒の來るあり。或は五六才或は十才十

餘才斗むらがり來りて姑に調そ、姑長二三寸の木札と與ふ孩兒よるこびてこれと得てはしりゆき。少選にして酒食菓子のためひ。その好む所の食物と携へ來り。みづゝらこれと食ひ。又姑と予に食はしむ。予性しみて姑に問ふ。是何の故ぞ姑の云。凡娑婆の父母妻子兒孫等。つねに善行と修し、僧に布施し。乞丐に施食するとあれば。その錢かならず冥府に歸するのこゝろさ。その所の亡者の得となる也。しられどもつねは放しに費そと許されず。今日は是放赦の日也。この日その錢とわらちとらしめ。その好む所の食物とくらはしむると。年々あつたこととし。今與ふる所の札と以、諸所の食物に換ゆ錢多きものは札も又多し。われ幸に此事と司るとゆるさる。只亡者として錢と玩しめず。故に札と以錢に換るといふ

予ふあつたこれと感慨す。このときこゝろにおもへらく。わが兄弟かの幼稚にして父母にかくれ。多く先祖の事跡と失す。去年家兄物故していよく後悔す。且祖父母は予が未生の日没し給ひてその貌とだにしらず。われ今こゝに來ると多年の志願とどげぬべしと。しきりに祖考兄弟に見んとと思ひ。則姑に問はく。予が父母併にふたりの兄等にあふて語るとと得べしや。姑の云この事尤安らさといへどもあふとと得べし。道猶遠し迷ふとなれど。叮嚀に指南す。予姑に辭して頻りに走ると數十町路せまく。四方暗くして更に方角としらず。行先に人あり。ゆるし給へど叫ぶと數聲。その聲尤悲し。近くなるまゝによくこれと見れば。予とともなひ來りし亡友也。予こゝろおどろき路の傍に伏してその

ありさまとみるに。身の丈七尺ばかりの目盲法師の亡友といたく折檻して云。汝何の爲に娑婆の陽人と伴ひ來れる。もしゆるるせば必地府の法と亂るべしと。既に鞭と數百杖。號哭の聲聞へあらず。予戰慄として惣身汗と流す。忽姑來り。呷て云。よあらず。汝はやく歸るべし。汝あへらざればあゝの友いよく苦痛とらく。人と苦しむると善根にあらずと。予こゝに於ていかんともそるとあたはず。あはたしく跟とかへして。元の道にはしり出るとおもへば忽然として覺ぬ。時に遠寺の鐘とあそふるに五更也。覺て後胃膈奔豕盜汗衣と浸せり。心氣既に定るといへども猶父母兄弟に見へざるとうらむ。嗚乎生死道と異にす。諺にいふ父子は一世の縁と。何そ夢にだもこれと語ると許さる。予元よ

り佛と信せず。夢も又五臟のわづらひ。あやしむにたらず。しるべし盲者の夢は聲と聞て形と見ず。しるれどもむしり小野篁六道より冥府にあよひ。笙の窟の日藏延喜帝に約す。そのと妄誕にちあしといへども。夢としいはなさにしもあらず。の白氏の三夢記。予が爲によき方人なるべし。

◎一年一日飽筆研

一年三百六十日。屏居常に留守とつらふも。其實は門外に杖と曳くと一にこれあること稀なり(此下一句不明)四五十年來苦樂の活業。筆とあへして箸となし。机とそむけて枕とす。名と賣て吾に益なく。書とあらはして書肆に利あり。儒にあらず。佛にあらず。造化の鹿相。何ぞこのしれものとうめるや。世の中に絶てあぐらのなかりせば。癖心の閑けあらまし

◎名古屋より 紀行

春はさくらのちまたに遊びて。櫻町有櫻 天満宮<sup>二</sup> あまつのみさんの  
のほよきにうれ。夏は柳の木蔭に涼みて。廣小路有柳 藥師<sup>二</sup> 涼地也  
瑠璃世界の蔭簧張と覗く。秋のもみぢは有松に絞らせ。名古  
屋の町は冬の夜より長し。

◎扇の雪花

鼠扇とちつてろの尻つち風のごとく。猫吹竹とくらつて  
なく聲われ鍋に似たり。

◎貸本招牌 應名古屋湖月 堂需作

古人琴書酒の三ツともて友とすし。うれども酒は下戸にめ  
いわくさせ。琴はゆるしに黄金としてやらる。只書のみ貴賤  
となく。老若となく。友とするに堪たりといへども。書も又得

あたきありて。高價にくるしむものあり。蓋一夜雇の女房。跡  
ばらとやます。十日限のし本紙魚のわづらひなし。尤かり  
て損のもるざるもの夕立の庇。春の日のし本。

◎七里津

宮より桑名へ七里。桑名より宮へ七里。宮より桑名が近き歟  
桑名より宮が近きか。此論千載論破とると能はず。

◎万歳畫賛

墨は舞筆はうたふて万歳のそはうも紅も何繪そらごと

◎藐姑峯雨 壬戌 紀行

箱根八里上流汗

騎馬越來行路安

却懼昨今阜月雨

明朝大井水漫々

函ね山雲の蓋して雨ぞふるその底くらもぬける手に



◎大磯 壬戌紀行

祐盛全盛大磯傳

千里高名虎御前

一夜風流襲乳鳥

只今有出女如鴛

◎小夜中山 壬戌紀行

小夜中山兒育錫

命今西行詠歌情

鐘響無間石啼夕

一冊由來明假名

◎贈吉田 漢文

三陽の曠漢主人は。その身吉田にありといへども。唯一の神道者にあらず。又兼好が和歌者流にもあらず。むろし吉田の梅若丸は墨水に漂流して都としたひ。今の曠漢子は豊川に沂て江戸としたへり。予西遊の日旅館の二階に立てはじめてかの子と見る。即招ずして來り。これと友としよし田也。蓋

惟は漢子意氣ちよんくとして稗史と愛し。戯文と作る。一たび筆ととりて鞭うてば。馬琴と千里の外にはしらせ。ふたゝひ口と開て今と談すれば。京傳と煙包のうちに投うつ。嗚乎剛勢おそるべし。予これが爲に嘆美すると三日三夜。終に戯文一編と遺して。大江戶戯作者の血脉と傳ふ。

◎書畫帖序 應吉田柏峯需

才子の文墨に遊ぶや。蓋机案は一個の戲臺のごとく。書篋は一個の戲房に似たり。墨忽舞筆既歌ふて。以無量の介となと畫者の形と圖するや。俳優の打扮に等しく。書家のこれに贊するや。生あり且あり。よく丑淨といましむ。吾戯文の如き。打譚撒潑多し。三州吉驛の柏峯。性書畫と愛す。このころ白紙數

張と綴りて。遠近の書畫文章詩歌ともどめ。風流一般の脚色となさんど也。則來りて予に叙と乞ふ。予辭するとあたはず。遂にこれが白となす。冀は四方雲集の觀官。筆歌墨舞してこゝに臨まば。是滑稽第一番の大戯場。

◎贈紅蓼文紀壬戌

虎の竹林に嘯き。猪の芳萱に眠り。鳳凰の梧桐と愛し。春鶯の梅花に嘯る。物おのゝその所と得て安し。三州吉田の紅蓼園は。畫とよくし文と作る。よて一驛の隅に置ず。當に京と江戸の真中におくべし。

◎審雨堂記應尾陽蟻殿三四需作

審雨堂は蟻穴の號なり。昔し淳于髡蟻室に陥て南柯の一夢と感し。貫之蟻通しにふれて雨頭に沃ぐ。蟻は是五常の蟲歟

義と以名とし。勇と以體とす。時と米とせおふて子路が孝にならふは仁にちかく。雨日路とゆづりて堯舜の時とたのしむは禮にちやく。物あれば友に報じ。事あれば王に告すは信にちかし。うべなるおな蟻の塘より堤くづれて囊沙の謀行れ。蟻のおもひ天に登りて。乙女の脛ふくれたり。羽あると飛蟻といひ。大なると蟻殿と呼ぶ。參四は則その人歟。夫蟻松は絞に名高く。蟻のどわたり禪に包る。彼は尾張にあり。是は股藏にあり。蟻よあり。蟻の器によるは砂糖の甘みと嗜む也。蟻殿の風流に遊ぶは談の甘みと愛する也。予これがために蜜劑一編無類あま口の報條とまるし。審雨堂風流の功能とひろむ。筆に毒なく。文にさし合なし。戯作一張用てまるべし

◎月光亭記應尾州北亭歌政需作

月は和漢最賞いんせうする所。まるき夜はこれと鏡にたどへて。葛城のあみさんと粧せ。細き日はこれと鎌によそへて。樂天が草枕とはらはしむ。白兔以下再考アリ杵とあぐれば。月おのづらうすつき蟾蜍足とあぐれば雲忽横飛とす。吳剛桂と伐とも作料とむさぼらず。嫦娥藥と盗めとも藥禮とはたられず。三五夜中天上にもみぢして。月暈かきの稱たらく。二六時中下界の的となりて。弓はりの名大也。春に秋に夏に冬に。實に天下の壯觀何ものゝこれにしらん。張府の歌政主人畫にたくみ也。嚮に亭と營てみづあら月光と號く。夫月光は金波也。或はこれと暉素といふ。主人そのむつらしきとどらず。月は畫の爲に愛し。畫は月の爲に嗜む。暮に欄かざしによれば月に隈なからんとおもひ。且に机にむるへば。畫にくまあらんとおもふ。もしこれ

ともて風流なしといは。晦日の月とまつ人なるべし。

ねころんで見る引窓の月影は田毎も家の中そらにあり  
 (再考) 羅公遠が雲のうけはしはる業の一本綱より危  
 ららず。月宮殿の霓裳羽衣は。影芝居のはやしゐたよりめ  
 さましありけん。然らば嵐本一〇券。鮎二六の一には。月前に  
 花とながめ。月下に盃とならし。月窓に書と閑し。月老に美  
 婦とおもふ。造化の一燈きもるときなく。世界萬物うつし  
 繪の浮繪に似たる好景佳境も。この君なき夜はよしなし  
 と。よしなし言といつゝるも亦是月の爲ならず。月見る  
 人の爲ならずやは。

◎竹樓記 壬戌紀行竹樓浪  
 花道頓堀酒樓

竹の物たるその用多し。一節火と吹て忽風と起し。一管煙と

合てよく雲と飛す。雪中の竹子。更に孟宗が孝に生じ。炎天の  
 竹夫人。七賢これと色に換ふ。漢武はこれと義と名づけ。子猷  
 はこれと君と呼ぶ。その枝は杖となりて。四皓が八本の足と  
 たそけ。その皮は笠となりて。東坡が二尺の屋根とふく。風の  
 前の垣根笛聲となして。季札が耳とかきろるし。絲による獨  
 樂。牛鳴となして。葛盧に絶倒せしむべし。昔夜郎は竹管より  
 生じて。羗兵きやうへいしたかひ。赫姫竹節に生じて。竹どり幸と得たり  
 夫深山の猛虎も竹林に入て嘯き。屋上の黄雀も竹叢に栖て  
 囀る。禽獸にして猶よく竹と愛そ。君子焉しよんじんぞこれと愛せざら  
 ん。坂府の竹樓は風流の藪澤也。道頓堀の流れにしては。川竹  
 もこゝに繁りて。秀色目にうるはしく。島の内長く通ひては。  
 絲竹もこゝにさるへ。清風耳に盈つ。予壬戌の秋。たま〜こ

の樓に登りて。一夕竹葉と汲む。歸路猶おもふ。一日も此君な  
 くばあらじと。よてこれが記と作りて。一管の竹筆とそめ。も  
 ていにしへの竹帛にのちるといふ。

◎ 祇園妓女贊

さがへの女中酒の味としらす。約束のお客蠟燭のたつとい  
 とはす。みな様御ぞんじ何屋の中居かり。赤前垂とたまさに  
 のへてはなやめ也。

◎ 又

加茂川廣くながれて。とけし帯の如く。ひがし山更につらな  
 りて。さしたる櫛に似たり。

めねあすむ春の夜遊に。歌女の散ける時花もあすそふ

◎ 贈浪速歌妓信詞 壬戌 紀行

千酒客にはのみとなでげんさい客には命とのふ。間に愛敬の眞素顔。三味線の聲ぞたのしむ。

◎浪花俠者畫賛

ちよとそこへ橋詰までは来てたもれ雲の出入の秋の月影

◎浪花ふり紀壬戌

難波村の稻穂は。惣嫁の手遊てびにしなだれ。前だれ島の蘆の穂は。伽やらふの小便のとうたがはる。椀久松山のむらし。石の手水鉢にのこり。しよ。六三がいにしへ。西横堀の材木にまのふ。なには雀のなにくれとなく。阿波野鳥の可愛とおもへ世界通用正に是。色も大さる。金も大さる。

◎贈書肆大野木詞紀壬戌

家は秋田にさるへて。金銀のみいりよるしく。氣は大野木と

稱して。材量既に満つ。嗚乎是本々に。書肆ぬけめなくしてめでたし。

◎桑名ふり紀壬戌

桑名の魚の店小田原町にまけず。川口のおやま品川に似たり。多度とたどりて八山とおもひ。しぐれ蛤と見て照りごまめと笑ふ。砂利場にあらぬ砂川あれば。九郎助ならぬ三介狐あり。やだ町の大門五十間道より長く。舟場の燈明臺たそや行燈より高し。八町の土手。七里のわたし。江戸もよしはら。こゝもよしはら。

◎蒲萄に栗鼠

木鼠のはしるぶだうの玉の枝にさん五の月の影ぞ照そふ

◎晦日の月

通人不仕妓君。遊女不見兩夫。

解易さしときは人に任せてもつまは重ねぬ里の湯上り

◎少女畫贊

想こゝも土用干せぬ箱入の娘もむしのつさやそくして

◎狸畫贊

罫は廣げて八疊の席とまうけ。腹は敲て一挺の鼓と鳴と。

万歳の疊かぞへてつゝみゐな

◎大黒畫贊

足に俵屋のおいらんと踏へて。手の槌牽頭に庭とはるせ。袋は呼出しの夜具包の如く。頭巾は見番の火鉢より丸し。手飼の白ねづみちうつばらといはず。お貌の溷鼠いるあげと用ず。一切衆生の無心と受け込む。萬福長者の大神客。

◎念佛講 贈金子氏頭

念佛講中月掛錢

彌陀本願一縵連

問説極樂尊通寶

増光金子會筵傳

◎布袋畫贊

家に老たるお袋とおもへば。釜に破れたる茶袋と繕ふ。守袋の子にはほだされては。十夜袋の念佛もおもはず。三文の智恵袋。五兩の堪忍袋。一升袋の一生と観すれば。世は糸瓜の皮のたんぶくるなるべし。

◎自戒

鶉とまなぶ鳥。水に入るともて危く。雪に遊ぶ鶯。雪と踏で跡なし。慎べし人生黒白の論悪に染ざれば何ぞ洗ふとと用ん

◎妓女贊

後朝易<sub>レ</sub>匪<sub>レ</sub>控<sub>レ</sub>茶日

初會難<sub>レ</sub>言行水宵

姫<sub>レ</sub>ゆりや花の中なる小女郎蜘蛛

◎獵者贊

鹿と追ふ獵師山と見ず。蠅と追ふ隱居腎虛としらず。眼はこゝろの奴。欲はわが身の警。今日最さととり安く。明日甚行ひおたし。

◎牡丹贊

花飛蝶駭不<sub>二</sub>人愁<sub>一</sub>

執着相生獅子頭

爭發牡丹鬪<sub>レ</sub>手扇

千秋万歳於<sub>レ</sub>今謳

◎紙鳶

紙鳶の製既にひさし。和名にこれと師勞之と記し俗たことといひいゝとよぶ。鷗高く舞で四<sub>レ</sub>谷の號あり。奴水と汲て赤

坂の稱なし。夫烏鳳巾月夜に鳴す。桃燈鳳巾闇の夜にわがらす坊主鳳巾に念佛の聲なく。袖鳳巾に紙衣の音あり。或は清玄鳳巾の櫻と散し。或は幽靈たこの柳にあらまる。吳楚東南の鳳巾軍は臥龍と書て風といのり。高木抄上の破れ鳳巾は列子と雇ふて骨とおさむ。芋環の糸の長きは。三輪の袖のひのしもおもはれ。風箏のおどの雲に響くは。天津乙女の音楽ならで。歌には聞ず發句には。あの信徳がものゝ名。たこや古郷のいゝくらげ。いざりするてふ海士が子も。空の千ひろの綱手にたはふれ。家越そる隣の孟母も糸とたちてとしへがたしたこく。ひだこ。あがつたらやいてくとさがつたらにてくと。煮ても焼てもくはれぬものは。小僧でつちに鉄火箸はど。瘦子に立孫打まじり。しやくつて泣せる笹屋の子。目

あら涙がふるふんべい。ひつあけたがる上戸の子。いんこの  
ねんねこ兒守の子。だまをやつたりおろしたり喧嘩のたね  
芋たこせんさく。尾に尾とつけて永き日も。これに遊べは晝飯  
とわすれ。これに耽れば犬糞とおそれず。モウシくは是毛詩  
紙鷲飛で天にいたり糸されて淵にはまる。風は君子の徳に  
たどへ。たこは小兒の毒にちろし。

糸と吐く蠶に似たるいろのはり十反斗り織てきぬらし

◎夜鷹

顔は不二ひたひとぬつてあのかまだらにしるく。口は茄子  
腹に似て齒なみまばらに黒し。ゆふべくの泊り。山嵎さた  
めぬ鷹にしあれば。草のまくらの夢も又よし。

◎橋邊柳

柳原ふる枝のみどり花とみせてあたらし橋も土手物の株

◎仇なる戀

思ひさや衣縫業も志らぬ手に針もて君が名とほらんとは



醴新書終

7/34

明治三十年十月一日印刷  
明治三十年十月六日發行

編輯者兼  
發行者

東京市京橋區南紺屋町一番地

井上勝五郎

印刷者

東京市日本橋區辨和泉町一番地

瀧川民治郎

發兌

東京市京橋區南紺屋町一番地

薰志堂

卷之十

雜錄

七

明倫彙編

家範典

禮儀典

卷之十

明倫彙編家範典卷之十

家範典卷之十

19

594

